
バカと居眠りとAクラス

nature

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

【Nコード】

N7700Y

【作者名】

n a t u r e

【あらすじ】

学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」。

その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄二らと繰り広げる学園ラブコメデー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも…。

初投稿なので変かもしれませんがよろしくです！
作者は受験生なので更新は不定期です。
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。
嫌だ！って人はお戻り下さい。。

ぶろろーぐ (前書き)

はじめまして。 natureです。

初投稿になります。 どうぞよろしくお願いします。

ぶろろーぐ。

春。 ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわぁゝ……。眠いなぁ……。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「……先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言う。

「……おはようつす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとする。

「実は、先生はお前を１年間見てきて「こいつは吉井と並ぶＦクラス候補なんじゃないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかったからな。」

やっと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかったな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもうやめろよ」「無理っす。」「…即答か。」

「じゃ、残り頑張ってください。」

そう言って魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる……。

ぶろろーぐ。(後書き)

記入してありますが、更新は不定期です。

ご了承下さい。

主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175 cm

体重 62 kg

見た目 顔は中性的。ってかどつちかという女子。

だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によって機嫌が悪くなっていく。

眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。

友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。

また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。

やっていいことと悪いことの区別をしっかりとつけている。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれたぐらい）

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打つてもダメージは低いが、
面、小手、胴、突きの位置（頭、両手、腹、喉）を的確に
打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。
つまり、2回の確に打つたら相手は補習行き。

腕輪 もう決めてありますが、秘密です。

A対Fが終わった辺りで更新するつもりです。

その他 中学まで剣道をやっていた。同じく中学で剣道を

やっていた（という設定）の須川と知り合い。

何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを氣が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄二は中学校で出会った。

雄二と初めて会ったときに…？

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思ってい
ないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で

料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもっているが、頻繁に更新
されるので、

正確な記録はわからない。

第1話 設備で重視すること。

「そういえば、あいつはこのクラスになったかな…」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おつ、ここか…でかいな。」

入ったAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃っていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコンetc…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走って駆け寄ってきた。

「ん？お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走ってきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」だった。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張って勉強しましたから…。」

「へえ、そいつは殊勝なこったな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないようでそう答えると、

「はい…。そういえば、この教室って大きいですね…。」

少ししよげている美穂は教室を見渡しつつ、こう言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだな」とか言いそうだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

そ か れ ら 少 し 経 つ て

「皆さん、席について下さい。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？時間か。」

そうは言っても席に座って話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かった美穂と話していた。

「そうみたいです…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人から願います。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁人くん。次ですよ。」

「…ん？そうか。ありがとな。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言う。

「いえ…／＼／。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないか…。」

前の人が終わわり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わったし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメート達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

第1話 設備で重視すること。（後書き）

いきなりコメントがきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございます！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下さった皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしています。

では、読んでいただき、ありがとうございました！

第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと1話1話の文字数が少ないかな？ってこの頃思っています。

第2話 代表さん達と顔合わせ！

「…ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経って、魁人は起きた。

「……ちよつといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席ってあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかった。」

「ま、日頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だったからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかったらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よろしく。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言うと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻っていった。

「へえ、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思ってたよ。」

「僕も、次席はもらったと思ってたけどね。まだ、甘かったみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこようと思ったんだけど…。」

「今は自習したいらしいね。」

「真面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかった、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆真面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけど。ただ、結構有名だよ？緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言うとしょと顔をしかめて答える。

そして、魁人は結構有名だという。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知っているらしく魁人に言う。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかって、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちよつとそれで騒いだけど…。」

「俺は自己紹介が終わったあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと言う。

「まあ、今次席になってるってことは十分な実力があるってことだね。」

「そうだろうね。まずは緑野君を目標にやらせてもらおうよ。」

「はは、まあ頑張ってくれ。じゃあ、俺はちよつと廊下に出てくるわ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出てくるという。

「ああ、行つてきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知った顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おい、明久、雄二！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄二」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどのクラスになったんだ？」

「てつきり僕らと一緒にと思ってたけど。」

雄二が何クラスになったか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になった。立派なもんだろう？」

「へえ。…ってAで次席?! うそお?!」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がらんばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のころからおかしいと思ってたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄二は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ、お前にはお見通しだったってわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻っていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ？…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思ったが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言っ て魁人は新校舎、そして教室へと戻っていった。

第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（前書き）

明日期末テストです。

え？勉強？ 何ソレおいしいん（殴

第3話 自習って寝るための時間でしょ？

「はあ？自習？初日からか？」

「そうみたいです。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしかけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言ったらしく、驚いた様子で言う。

「雄二…いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとな…。」

（あいつのことだからな…。A前のちょっとした仕掛けってどこか…。）

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄二の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁人くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かったら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したらどうですか？」

「ん…。課題は出てるか？」

「出てます。プリント3枚だけですけど…。これを今日中にやれ
って。」

美穂に言われたため、課題だけはやろうと思ったのか、課題はあるか聞く。

「教科は？」

「全部数学です。」

「数学か…。ちゃっちゃと終わらして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはり寝る気らしく、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?! もう終わったんですか?!」

始めて3分程でもう終わったらしく、寝る体制に入る。

「あれ？緑野くん？寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わってます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気でしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だったしな…。」

「だって言っても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ1枚目がやっと終わるところだった。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りにおちていた。

「でも、緑野くんって寝顔かわいいよね こうしてると女の子みたい」

「え？！／／…そ、そうですね…／／／」

愛子が魁人の寝顔を見てそう言うと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか?!」

「いゝや、なんでもないよ　じゃあボクは戻るねえ」

愛子はおもしろいものを見つけた、というふうに笑うと、自分の席に戻っていった。

「もう…。さて、私も課題を終わらせないと…／＼／」

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気になるらしく、なかなか進まなかった…。

「…ん、ふわああ、もうこんな時間か…。」

魁人が起きるともう下校時刻らしく、何人が帰る生徒が出てきていた。もうプリントも回収されたらしい。

「あ、起きましたか？」

「ん、美穂か。お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、よかったら、なんですけど…。」

「ん？どうした？」

美穂は何か頼み？があるらしく、魁人に言う。

「…一緒に帰りませんか？」

美穂は顔を赤くしつつ、そう魁人に言う。

「ん、別にいいぞ。保育園からの付き合いなんだから、そんな遠慮することないだろ。」

ただ、魁人は友達感覚で言っていると思っているらしく、そう答える。

「そうですね…。はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っていると思ったらしく、ため息をつく。

「ちょっと緑野くん。そういう態度は感心しないなあ。」

「ん？工藤さんか。どういうことだ？」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういうって…。魁人くん、美穂ちゃんが幼馴染だからっていうただそれだけの理由で誘ったと思ってるの？」

「ああ。他にどんな理由がある？」

「はあ…。これは思ってた以上に強敵だね…。頑張ってね…。」

「はい…。わかってましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言う。と教室を出て行った。

「？ なんなんだ？…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい！」

魁人は意味がわからない、というように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもって、すぐ後を追いかけていった。

第3話 自習って寝るための時間でしょ？（後書き）

タグで主×優子とか書いという全然優子が出せない…。

つ、次は出せると思います！

次も読んで下さると嬉しいです！

それでは！ お読み頂き、ありがとうございました！

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。

「しかし、今日の魁人くんの課題の早さには驚きました…。」

「まあな。1年の頃を知ってるやつなら皆そう言うだろう。」

只今、下校中。

「でも、美穂は俺のことよく知ってるんだから、そんなに驚くことでもないだろ。」

「あそこまで早いとは思いませんよ…。試験で数学何点だったんですか？」

「忘れた。腕輪は余裕でとれてたけどな。」

「…400点が余裕って時点でおかしいと思うんですけど…」

「そうか？……ん？」

魁人は何か見つけたようで歩くのをやめる。

「どうかしましたか？」

「…悪いけど先に帰っててもらえるか？」

「え？」

「明日に繰り越して…。」

「まあ…。いいですけど…。それじゃ、また明日。」

「ああ、悪いな。」

魁人は美穂を先に帰すと、改めて「何か」の方を見る。

「…やっぱ、人助けはしとくべきだよな。」

魁人は走って「何か」…。助けるべきと判断した所へ向かう。

「なあ、ちょっとだけだつて。一緒に楽しいことしようぜ?」

「嫌だつて言ってるでしょ!」

「ちつ、しょうがねえ、力づくでいくか…。」

「え? ちょ、ちょっと…。」

チンピラ風の男達3人がある女子1人を囲み、迫っていく…。

「…ったく。そんなことしてて恥ずかしくねえのか?」

「ああ？…ぐあつ！！」

「おい、どうした…ぐつ？！」

チンピラの1人が手を伸ばしたとき、不意に鈍い音が響き、その男は倒れた。

更に次の瞬間には、もう1人、地に倒れていた。

…そこには黒の木刀を持った男子が立っていた。

「な、なんだお前は？！」

「ああ？てめえらごときに名乗る名前なんざねえな。俺に勝てたら教えてやるぜ？」

「てめえ、なめやがつて！！」

「…屑が。」

そう呟いた瞬間、最後のチンピラは倒れていた。

「…怪我はないか？」

「え、ええ。大丈夫。ありがとう。」

「それはよかった。」

ガヤガヤ…

「おい、あの黒刀、もしかして…。」

「ああ、あの強さ…。」

「あの悪鬼羅刹と互角にやりあったって…。」

この戦い（リンチ？）を見ていた人々は男子の正体に心当たりがあるらしく、口々に呟いている。

「おっと、目立ちすぎたな…。じゃあな！」

そういつて男子は笑顔を残し去っていった。

それを見た助けられた女子は

「…かっこいい／＼／」

と顔を赤くしていた。

「つたく、また目立つちまったな…。」

「よう魁人。また噂されるようになったな。」

「…茶化すなよ、雄二。」

「まったく、困った人を放っておけないってのは不便だなあ？」

「…まったくだよ。お前との一件のせいで、もう目立ちたくない
って思ってたんだがな…。」

翌日。

「おはよう。」

魁人は教室に入る。

「おはようございます。」

「おはよう、緑野くん。」

「やあ、緑野くん。」

美穂、愛子、久保があいさつをかえす。

「緑野くん、今日も眠そうだね。」

「いくら寝ても眠気がとれなくなてな…。」

他愛もない話をしていると、魁人の後ろからもう1人入ってきた。

「あ、優子。おはよう。」

「愛子、おはよう……ああ！？あなたは?!」

「ん？」

入ってきた女子は魁人を指差すと急に大声をあげた。

「ああ、お前は昨日の…。」

「え？何、魁人くん、優子と知り合いだったの？」

「ああ、昨日、ちょっとな。」

入ってきた女子は昨日魁人が助けた女子…「木下 優子」だった。

「あ、あの。昨日はありがとう。」

「大したことはしてないさ。あの後、大丈夫だったか？」

「ええ。心配してくれてありがとう。」

「昨日…？昨日、私と別れた後ですか？」

「ああ、そうだ。木下さんがチンピラにからまれてたんでな。助けた。」

「だから私を先に帰したんですね。」

「ああ、危ない目にあわせたくなかったからな。」

優子は昨日のことでお礼を言い、魁人は昨日あったことを説明した。

「でも、何か意外だな。緑野くんが人助けというか…。そういうことに首をつっこむのは。」

「困ってる人は放っておけない性分だな。女子なら尚更だろ。」

久保が少し意外だと言うと、魁人は困っている人は放っておけない性分だと言う。

「でも、なんかっこいいよね、そういうの。優子も惚れちゃったんじゃない？」

愛子がふざけて言う。しかし優子は

「な、何言ってるのよ？！／／／そんな訳ないでしょ？！／／／」

と、明らかに焦ってしまっている。

「…冗談だったんだけどなあ…。へえ、まさか優子がねえ…。」

愛子は簡単に見抜いたが、魁人は

「本当だよ。俺が女子にもてる訳ないだろう？」

と的外れなことを言っている。

「しかも木下さんみたいなかawaii人が俺に惚れる訳ないだろうが。」

「なっ?! / / / / /」

優子は顔を文字どおり真っ赤にする。

「…鈍感で、しかも天然かい？」

「ホント、罪だよねえ…。」

魁人の発言に久保と愛子は苦笑いしている。

「…まさか、優子さんが…。」

その中で、美穂は1人で何か呟いていた…。

第4話 下校中って何か起こる確率高いよね。(後書き)

紫苑さん、コメントありがとうございました！

やっとう子出せました…。

…優子ってこんなキャラだっけ？w

正直、今回の話は自分であまり納得がいつてません。

優子の話の件の流れが無理矢理すぎるかな？ちよっとおかしい思っています。

まあ、自分の文才がないのを恨むしかないんですが…。

そついうことなんでいつかちょっと手直しするかもしれません。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂きありがとうございます！

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。

「あれ？今日はちゃんと授業受けるんですね？」

魁人が授業の用意をしているのを見て、美穂は聞く。

「ああ、たまには、な。それに…。」

「？」

「…多分授業は午前中だけだろうからな。」

「え？それ、どういうことですか？」

「午後になれば分かるさ。」

魁人はおそらく授業は午前中だけだと言い、美穂は首をかしげる。

「これで午前中の授業は終わりです。」

「ふう〜…やっと終わったか。」

「そうですね。それで、さっきのことってどういことですか？」

「ん？いや、多分そろそろFクラスがBクラスに宣戦布告にいつてるだらうからな。」

「そんなこと、なんで分かるんですか？」

魁人が午後の授業がなくなる理由を話すと、美穂は不思議そうにする。

「なあに、ちょっと考えれば分かるさ。さて、飯でも食うか…。」

そう言つと、魁人は弁当を広げ始める。

「緑野くん、それって手作り？」

「緑野くんが料理できるなんて、意外だな。」

そうすると、愛子と久保が弁当をもって魁人の席まで来た。

「あ、ご一緒してもいいかな？」

「別に、かまわない。美穂もいいだろ？」

「はい。是非。」

「なら、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「あ、待って、アタシも！」

優子も弁当をもってこちらまで来る。

「それで話を戻すけど、緑野くんって料理できるんだね。」

「ああ、一応な。」

「あまりそういうイメージではないけどね。少しもらってもいいかい？」

「別にいいぞ。好きなもの取れ。」

「あ、アタシもいい？」

「ボクも！」

そういつて皆が魁人の弁当をとろうとする。

「あのー、久保くんはともかく、女子はやめた方が…。」

「え、なんで？」

美穂の忠告に愛子は聞き返す。

「…女子としてのプライドが欠片もなくなりますから…」

「え？それってどういう…」

皆が魁人の弁当を食べると、動きが止まる。

「ん？不味かったか？」

「いや、違うと思います…。」

「…驚いたな。凄く美味しい。」

「…そうだね。さすがのボクでも、男子にこれほどの料理をつくられると…。優子なんて再起不能になってるし…。」

「…美味すぎる…こんなの、勝てるわけ、ないじゃない…。」

久保と愛子は驚愕の表情をし、優子はなにやらぶつぶつ呟いている。

「そうか？俺的にはこういう弁当より、スイーツ系の方が自信があるんだがな…。」

「え？スイーツ？」

「1回食べましたけど、意識が飛ぶほどおいしかったです…。」

愛子は「スイーツ」という単語に興味を示す。

「デザートで一応、シュークリームなら作ってあるが食うか？」

「…普通学校のデザートでシュークリームを持ってくるかい？」

久保は普通ありえないデザートに苦笑いする。

「シュークリーム?!ボク、大好物なんだ!ちょうだい!」

「ん？…ほら。」

魁人は何か思いついたようで笑うと、シュークリームを愛子に差し出す。

ちなみに優子は美味しすぎる弁当をまた食べたため、今度はどこかヘトリップしている。

「ありがとう！……。」

愛子はシュークリームを取ろうと手をのばす。

だが、届かない。

なぜなら。

「…なんでどんどん手を遠ざけていくのさ。」

「ん？なんのことだ？」

ちよつとした意地悪である。

「ほね。」

「……。」

愛子が手をのばすが、その度に魁人がよけるため、愛子はシュークリームを手にいれられない。

「むっ……。早くちょうだい！」

「なら、早くとればいいじゃないか。」

底意地の悪い顔をして魁人は言う。

「魁人くん、そろそろ意地悪はやめてあげたらどうですか？」

「ん、そうだな。ほら、やるよ。」

美穂に注意され、魁人は愛子にシュークリームを渡す。

「ありがとうー！……はむっ。」

愛子はやっと手に入れたシュークリームにかぶりつく。

「おいしい……幸せ……。」

そして愛子もトリップしてしまった。

「……あゝあ、2人とも再起不能になっちまった。そこまで美味しいか？」

「……とても美味しいと思うが。」

「慣れちまったから……。自分じゃわかんねえ。」

こうして、昼食は2人の犠牲者を出して終わった。

この頃、屋上では別の意味で再起不能者が出ていたが…。

…関係ないっす。

「今日の午後は自習になります。」

高橋先生が教室に入りそう告げると、すぐに教室を出て行った。

「本当に自習になりましたね…。」

「な？言っただろ…。」

魁人の予想は的中し、美穂は感心する。

ちなみにトリップ者2名はつい先程現世に帰ってこられました。

「一応課題ぐらいはやつとくか…。げ、英語かよ…。」

今日の課題は英語プリント2枚である。

「ん？緑野くんって英語苦手だったの？」

すると優子が魁人に声をかける。

ちなみに、意外と魁人と優子の席は近かったらしく、魁人の席の左前だった。

「…教えてあげよっか？」

「そうだな、そうしてもらえると助かる。」

優子の申し出を魁人は迷うことなく受ける。

「で？何が分かんないの？」

「…文の作りがまったく分からない。単語や連語、表現技法なら分かるんだがな…」

「…それで次席をとれるってどういうことよ。」

魁人の英語の点数は150点前後である。

「この程度できてれば普通はOKだろ。Aクラスだからそう感じるだけで。」

「まあ、そうなのかもしれないわね…。いい？まずここはこの疑問詞から初めて…この文法でこれを表して…。」

「ああ、なるほど…。で、ここでこの使い方か。」

「そう。なんだ、やればできるんじゃない。」

魁人も基礎はしっかりしているらしく、少し教わるとすぐに出来るようになった。

「いや、木下さんの教え方がいいからだよ。ありがとう。」

魁人は笑顔でそう答えると、次々と問題を解いていった。

プリントの問題はほぼ同じ部分の復習だったので、1度理解するとすらすら進められるようになっていた。

「い、いや…。じゃ、じゃあアタシは席に戻るわね…。」

「ああ、ありがとな。」

そう言うつと優子は席に戻っていった。

（2人でああしているだけでこんなにドキドキするなんてね…。
どうやら、本格的に惚れちゃったみたい…。って、アタシ、何考えてんの?!）

自分で考えてて恥ずかしくなったらしく、優子は顔を赤くし、自分のプリントを進めていった。

「……………」

美穂はそれを複雑な面持ちで見ていた…。

第5話 この時期のAクラスって凄い暇だったと思う。（後書き）

なんか、恋愛が上手くかけないっ！

誰かアドバイスを…（泣

次回も読んで下さると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

(前書き

…なんかどんどんタイトルが長くなってるw

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

「ふああ……。やっと学校終わりか……。」

魁人は大欠伸をしながら言う。

「あら？珍しいわね。ずっと起きてたんだ。今日1回も寝てないんじゃない？」

「そうだな。午後寝ようと思ってたから、午前は寝てないし……。」

「午後は何やってたの？」

「木下さんに教わったことの復習。忘れないうちに復習しようと思って。」

「緑野くんにあそこまで出来ない教科があるのは意外だったわね……。あれで次席とれるんだったら英語でもうちよつと点とれるようになれば主席でも狙えるんじゃない？」

「それは勘弁だな。試召戦争では前に出たいしな。」

「まあ、男子は皆そう言うわよね。」

魁人は優子と談笑している。

「……………」

美穂はその様子を黙って見ている。

「…いいの？このままじゃ優子に先行かれちゃうよ？」

「良くはないですけど…。でも…。」

「じゃあ、ほら！」

「えっ？…きゃっ？！」

愛子は美穂を魁人達のほうへ押し飛ばす。

「ん？美穂か。…ああ、そういえば今日も一緒に帰るんだったか。」

「え？あ、はい！そうですね…。」

魁人は昨日の約束を思い出したらしく、帰る支度をする。

「よつと…。じゃあ木下さん、また明日な。」

「ええ、また明日。」

「じゃ、行くか。」

「はい。木下さん、さようなら。」

そういつて、魁人達は教室から出た。

「ちょっと悪いけど校門のところで待っててくれるか？」

「別に構いませんが…。忘れ物ですか？」

「いや、ちょっとFクラスに用があつてな…。悪いけどちょっと待つてくれ。」

「分かりました。校門でまっています。」

「悪いな。」

そういつて、魁人と美穂は一旦別れた。

「ここが、Fクラス。…ん？」

魁人が扉を開ける前に扉が開いた。

「ん、魁人か。ちょうど良かった、ちょっと聞いてほしいことがあるんだが…。」

そこには、雄二、明久、康太、姫路がいた。

「どうした？」

「今、俺達がBクラスと戦争してるのは知ってるだろう。」

「ああ、それで？」

「実は、今Cクラスが不穏な動きを見せていてな。不可侵条約を結びたいんだが……。」

「……………」

雄二の話を聞くと、魁人は考えこんだ。

「……お前ら、Bクラスと何か条約をむすんだか？」

「よくわかったな。今適用されているのは明日の再開戦までの一切の試召戦争に関わることの禁止だけだな。」

「……それだ。」

魁人が口を開くと、雄二は答え、魁人は笑う。

「おそらく、Cクラスで条約を結びたい、と言ったら、Bクラスがでてきて条約違反だと言う気だろう。」

「なるほどな……。だが、BクラスとCクラスには何かつながりがあるのか？」

「あまり知られていないが……。BとCの代表は付き合っている。」

「

「…そうか。だからこっちに有利な条約を結んだわけか…」

魁人は自分の推理を話すと、雄二は理解する。

「え？どういうこと？」

だが明久^{バカ}には理解できない。

「なんかバカにされた気がするよ?!」

「しょうがないだろ。バカなんだから。」

「…お前はバカ。さっきのは俺でも分かった。」

雄二と康太に駄目押しを食らい、バカ（明久）は「ちょっと?!」
…こっちに入ってくるなよ。

「それで、どうするんですか？」

「そうだな…。条約を結びにきた、と見せかけてあいつらをはめてやるか。」

「なら、俺は邪魔だな。待たせてるやつがいるから、俺は帰るぜ。」

「彼女か？」

「んなわけなえだろ。じゃあな、上手くやれよ。」

「ああ。ありがとな。」

姫路の問いに雄二は答え、なら俺は帰ると、魁人はその場を離れた。

「けっこう待たせちまったか？」

「悪い。待たせたな。」

「いえ…。じゃあ、帰りましょう。」

「ああ。」

そうして2人は帰っていった…。

（今日は緑野くんとけっこう話せたな…。）

一足先に帰っていた優子はもう家についていた。

今日のことをふりかえっているようだ。

そして、1つの不安なこと。

（緑野くんも、秀吉のことを知ったら、あいつに流れていつちゃうのかな…。皆みたい…。）

男であるはずの弟、「木下 秀吉」にしか皆、目がないこと。

（嫌…！そんなのは…。緑野くんなら、そんなことは…。でも…。

）

優子はその不安を振り払えずにいた。

第6話 カップルが別クラスの代表同士になるって凄い偶然だと思う。

（後書き

なんか、美穂があまり目立たなくなってきた…。

うーん、ヒロイン2人って難しいな…。

次回も読んで頂けると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？

登校中…

「ん？…あれは…。」

誰か見つけたようです。

「なんだ、雄二か…。」

「…自分からこつち来て、それがよ…。」

「しかし、今日は早くないか？」

このまま学校に行くとH R 3 0分前になります。

「ああ、やることがあるんでな。」

「ふ〜ん…。で、昨日はどうなった？」

「鎌かけたら簡単に言ってくれたよ。卑怯者もひっかかって出てきて、一網打尽だ。」

昨日あれから見事に策を打ち破り、逆に相手に痛手を与えてやったらしい。

「あいつはとり逃したが、他のBのやつ5人ちよっと、補習に送ってやった。」

停戦中だったが、先生らの審議の結果、そのB連中は今回の戦争には出れないらしい。

「成る程な…。で、Cはどうするんだ？」

「それを今からなんとかする。ちよつと用意があるから、先に行くな。」

「ああ、じゃあな。頑張れよ。」

雄二を見送り、魁人は1人で登校した。

「はよ〜。」

教室に入り、一応挨拶する。

「おはようございます。」

「おはよー、緑野くん。」

「おはよう。」

美穂、愛子、久保が返す。

「あ、おはよう、緑野くん。」

優子も遅れて返す。

「今日は俺より早かったんだな。」

「昨日がいつもより遅かっただけ。いつもこのぐらいよ。」

昨日自分より遅く来ていたため、いつも自分より遅く来ていると思った魁人が聞くが、優子は昨日が特別遅かっただけだと言う。

「昨日でFクラスとBクラスの決着がつかなかったらしいから、今日も自習だろうな…。」

「2年に上がってからまともに授業してないよね…。」

魁人がいうと愛子が苦笑いで返す。

「まあ、楽だからいい」木下 優子はいるっ?!「…なんだ?」

魁人が楽だからいいと言おうとすると、急にドアが開き、誰かが叫びながら入ってくる。

「木下 優子…私達を豚呼ばわりして…許せないわ!!」

「はあ? 話が見えないんだが?」

「君はCクラス代表の小山さんかい? 木下さんは朝からずっと僕らと一緒に居たが?」

Cクラスの代表「小山 友香」は優子に怒りを込めた視線を送り、
「そんなこと言っても騙されない！！私達Cクラスは、Aクラス
に宣戦布告するわ！！」

と、Aクラスに試召戦争をしかける。

「あゝ、ついにきたね。本来こっちはなんのメリットもないけど。」

「……下位クラスからの宣戦布告は拒否できない。」

いつの間にか翔子も来ており、試召戦争のルールによって回避できないと話す。

「…ちっ、雄二め…。こういうことか…。」

「え、どういうこと?」

「なあに、誰の差し金か分かったってだけの話だ。」

魁人は面倒くさそうに話す。

「でも、今はFとBが戦っていますから、私達は開戦できませんよね?」

「FとBの決着がついたらもう一度来るわ…。首を洗って待ってなさい!」

美穂の疑問に友香はそう答えると、ドアを思い切り閉め、帰っていった。

「…しかし、優子にすごい敵意むき出しにしてたね。」

「……。」

愛子はそう言うと、優子は身に覚えがないため、戸惑っているよう。

「…気にするな。木下さんが何かやったわけじゃないんだろう?」

「う、うん……。」

「なら、気にすることはない。こっちは何もしていないんだからな。変な心配はするな……。」

「…ありがと。」

魁人は優子を励まし、頭にぼんぼん、と手をのせると、優子は恥ずかしそうにお礼を言った。

「…天然、鈍感だからこそできることだよねえ……。」

「…それにも程があると思うけどね……。」

愛子と久保はいつもどおり苦笑いする。

「……。」

そして、やはり美穂は複雑は顔をしている。

「さて、宣戦布告されたんだ、こっちも用意しなきゃな。」

「え？でも…。」

「……あっちがいつ終わるかわからない。」

魁人が言つと、愛子と翔子が疑問をかえす。

「遅くとも午前中には終わる。絶対にな。」

「…ちなみに、緑野くんはどっちが勝つと思ってるんだい？」

魁人は断言すると、久保が勝敗の予想を聞く。

「F。そもそも、屑が代表をやっているクラスに雄二達のクラスが負けるはずがない。」

「随分信頼してるのね…。」

魁人はBクラス代表「根本 恭二」が心底氣に入らないらしく、屑呼ばわりする。

「それで、霧島さん。頼みがあるんだが…。」

「……何？」

魁人は代表である翔子に頼みがあるという。

「今回の戦争の指揮、俺に任せてくれないか？」

真面目な顔で翔子に指揮権をくれ、という。

「……別に、構わない。代表の私は動けないから、それが妥当だと思う。」

「ありがとう。じゃあ、早速、策の説明をするか……。」

魁人は策の説明をしたいようだが、まだ生徒は揃っていない。

「……朝のHRのときだな。そこが一番いいだろ。」

「……そうですね。皆集まってますし、宣戦布告のこともそのとき話しましょう。」

魁人の言葉に、美穂は賛同する。

「しっかりやってね？ 緑野くんがしっかりしないと、クラスが負けるんだから。」

「分かってる。やるべきときには、ちゃんとやるさ。」

魁人は珍しくかなり真面目な表情でそう答える。

「頼んだよ。」

「頼りにしてるからね。」

「……じゃあ、私達は席に戻る。」

その顔を見て安心したのか、皆は安堵した顔で席に戻っていく。

「…さて、期待と、クラスの命運を背負ってるんだ。真面目にやんなきゃな。」

そう言つと、魁人は自分の席のパソコンに向かう…。

第7話 恩を仇で返すってどゆこと？（後書き）

コメントを頂きました！

紫苑さん、毎回ありがとうございます！

朝の出来事だけで1話終わらせてしまった…。

次は魁人の策が披露されます！

面倒くさがりの真価やいかに？w

次回も読んでいただけると嬉しいです。

お読み頂き、ありがとうございました！

第8話 策士としての才能 開花？（前書き）

テストからの逃避、継続中w

第8話 策士としての才能、開花？

「さて、でかい声だったから知っているやつもいるかもしれないが、俺達AクラスはCクラスに宣戦布告された。」

ガヤガヤ…

「いつか来るとは思っていたが…。」

「ああ、こんなに早く来るとは…。」

「でも、今はFとBがやってるから試召戦争は無理なんじゃないの？」

あまり知っている人がいなかったらしく、教室内はざわめく。

「…さて、一回静かにしてくれ。」

頃合をみて、魁人は場を鎮める。

ちなみに、普通は代表が前に立つものだが、代表が

「……私はそういうの苦手。緑野がやって。」

ということで、魁人が前で話している。

まあ、一応翔子も前に居るが。

「…指揮権についてはさすがに代表が言った方がいいだろ。」

「……分かった。」

代表から直接指揮権については話してもらったほうがいい、と考えた魁人は、翔子にそう促す。

「……今回の試召戦争では、学年次席の緑野に指揮をとってもらおう。皆、緑野の指示を聞くように。」

ザワザワ…

「なんであいつ…?」

「でも、次席らしいよ?」

「代表も確かにそういうことは苦手そうだけど…。」

魁人の指示を聞くことに抵抗のある人が多いらしく、また教室はざわめく。

「ほら、ちゃんと緑野くんの言うこと聞いて!」

今度は優子が鎮める。

「ありがとう、木下さん。」

「いや、いいわよ。それより、話の続きを。」

「ああ。今回はとりあえず俺の指示に従ってもらいたい。今回それで失敗したり、気に入らない策だったりしたら、次からは他のや

つに指揮をしてもらう。それでいいか？」

「そうだな、今回はいいんじゃないか？」

「お手並み拝見つてところだね。」

他のクラスメートも納得してくれたようである。

「ありがとう。それじゃあ、今回の策を説明する……………」

「…以上だ。何か問題点、質問などあるやつはいるか？」

最後に問うが、誰も手をあげない。

「じゃあ、この策でいこうと思う。皆協力をよろしく頼む。」

『おー！！！！』

基本、ノリがいい人達みだいである。

「はあ、緊張した。」

「全然、そうは見えなかったけど。あーいうの、合ってるんじゃない？」

「確かにね。立派だったよ。」

魁人が席に戻ると、いつもの4人が近付いてきた。

「そうですね。堂々として、かつこよかったです。」

「そうだね。」

「ありがとう。」

それぞれが魁人を褒め、本人も満更じゃない様子である。

「でも、大丈夫なのかい？あの策だと、緑野くんが大変すぎると思うんだが。」

久保がさっきの策について聞く。

「これぐらいやないと皆ちゃんとしてきてくれないしな。それに、それほど大変じゃないさ。1人じゃないしな。」

「ま、そりゃそうだね。緑野くんならなんとかかなりそうだし。」

「だが、俺が成功させるには皆の協力が必要不可欠なのはさっきも言った通りだ。お前らが少しミスると俺達が危険になる。背中はそのんだぜ？」

「ああ、わかってるさ。」

「任せて！」

久保と愛子はやる気が全面に出ている。

まあ、クラスメートは全員やる気だが。

「美穂と木下さんも、よろしくな。」

「もちろん、やれるだけはやるわ。」

「頑張ります！」

優子と美穂も気合を入れている。

「まあ、開戦はおそらく昼の後だ。こんなに早く気合を入れて、開戦時になくなっちゃわないようにな。ペース配分を考慮しろよ。」

「…流石にそんな馬鹿なことはいしないよ。」

魁人の忠告に愛子は苦笑いする。

「じゃあ、俺は寝て、体調を整えるか…。」

「試召戦争前だっっていってるのに、よく寝れるわね…。」

魁人は優子が言い終わる頃には、もう寝息を立てていた。

第8話 策士としての才能、開花？（後書き）

うーん、やっぱり文字数少ないかな？

今回魁人が話したところは、A対Cが終わったら書きます。

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！

「さあ、開戦5分前だ…。皆、策は覚えているな？」

『もちろん！』

「俺達の背中には諸君らに任せたぞ！」

『任せとけ！！』

最高にノリのいい皆さんでした。

Aクラスのイメージはどこへやら…。

「緊張しますね…。」

「そうね…。でも、多分これからこういうことも増えるはずだから、慣れないと…。」

「ボクは少し楽しみかな。」

「本格的に召喚獣を動かす機会は少なかったからね。僕も楽しみだよ。」

美穂、優子、愛子、久保といういつものメンバーが魁人のまわりに集まっていた。

「さて、俺達はそろそろ準備しておくぞ。」

「「そうね（そうですね）…。」」

「頼んだよ。勝敗は君らにかかってるんだからね。」

「分かってるさ。そっちもしっかりやってくれよ?」

そう言うのと、魁人、美穂、優子の3人は広い教室のどこかへ消えていった…。

「3…2…1…。」

『開戦だ!』

遂に開戦の時間になった。

しかし、Aクラスのメンバーは動かない。

「さあ、何人でくるか…。」

「全員だっただけに終わるんだけどね。」

久保と愛子も動かず話をしている。

『Aクラスを潰せええ!!』

『俺達を罵倒したAクラスを許すなああ!!』

そこへCクラスが突撃してきた。

「来たよ!」

「よし、クラスのはぼ全員がいる…。今だ!男子、動くぞ!」

男子の指揮権を預かった久保が指示を出す。

すると、男子は2つに別れ、翔子を守るのは横1列になった女子だけとなった。

『どういうことだ?!』

『かまわん!そのまま女子を突き破れ!』

頭に血がのぼり、冷静な判断ができないCクラスは、かまわずそのまま突っ込む。

「男子!作戦どおり後ろからたたくぞ!策を忘れず、冷静に戦え!」

『おお!!』

すると、2つに分かれていた男子が、Cクラスの後ろで1つになった。

「1人も逃がすなよ！」

久保は普段からは想像できない声で指示を出す。

『かこまれたぞ?!』

『前は女子しかないんだ!このまま突き進むぞ!』

「皆、ここが耐えどころだよ!焦らず、冷静に対処して!」

今度は女子の指揮権を預かった愛子が指示を出す。

「緑野くんが言ったことを忘れずないで!1対1なら負けないよ!」

魁人の策を忠実に守り、Cクラスを包囲していく。

「よし...、ここまででは緑野くんの作戦どおりだね...。」

愛子は安堵の息をつく。

「男子、策が成功したからって、油断するな!」

しかし久保は気をゆるめることなく指示を出す。

「おっと、ここで落ち着いちゃ、駄目だね...。」

愛子も気を引き締めなおす。

「女子もだよ!ボク達が崩れたらAクラスが危ないんだからね!」

「勝つのは、絶対僕達Aクラスだ（よ）！！」

愛子と久保の声が重なる。

その声に応えるように、Aクラスは歓声をあげる。

「…あっちは上手くやってくれたみたいだな…。」

「そうですね。こっちもそれに応えないと…。」

「あんまりゆっくりやってると、あっちが危なくなるから、早くいきましょ？」

「ああ、そうだな。」

魁人、美穂、優子の3人は高橋先生を連れ、Cクラスへ向かっていった。

男子が2つに分かれた時、それにまぎれて教室を出ていたのだ。

「ここか、Cクラス…。」

元々場所が近いので、すぐについた。

ガラッ！！

「高橋先生、数学のフィールドをお願いします！俺達3人がCクラス6人に数学勝負を挑みます！！」

「承認します！」

「え?!」

「『試験召喚獣、試獣^{サモン}召喚!!』」

CクラスはAクラスが来ることを予想していなかったのか、代表の友香と、生徒5人しかいなかった。

そして3人の点数が表示される。

数学

Aクラス

緑野魁人&木下優子&佐藤美穂

867点&377点&343点

「へえ、2人ともけっこうできてるんだな。」

「緑野くんに言われてもね…。」

「私達の点数をたしても、魁人くんに届きませんし…。」

魁人は得意の数学のため、異常な点数をとっている。

「さあ、早く召喚してくれよ。それとも、降参か？」

「くつ、調子に乗るんじゃないわよ！試獣^{サモ}召喚！」

数学

Cクラス

小山友香&その他5人

188点&150ぐらい×5

『俺達の扱いひどくない?!』

いや、だってモブだし。

『orz』

「じゃあ、行くぜ！」

魁人は高得点のため、瞬間移動にも近い速さで接近していく。

魁人の召喚獣は剣道の胴着袴に竹刀をもっている。

「まず2人！」

そう言うと、一瞬で2人の両脇腹を1回ずつ打ち、消滅させる。

『な?!』

「美穂、木下さん、そっちの2人は任せた！」

そう言いながら、魁人は相手の喉元に突きをくらわせ、相手がよろめいたところに剣道でいう「面」をきれいに決め、友香の召喚獣に接近していく。

「…このままだとアタシ達が倒す前に終わりそうね。」

「そうですね…。」

そんなことを言っている間に魁人は友香の召喚獣を一瞬で切り捨て、勝負をつける。

「ん?なんだ、お前ら戦わなかったのか？」

「緑野くんが終わらせるのが早すぎるのよ…。」

優子は呆れて言う。

「勝者、Aクラス！」

こうして、Aクラスの初戦争は30分もたたずに終戦を迎えた。

第9話 開戦！！Aクラス対Cクラス！（後書き）

設定には書かなかったんですが、魁人は召喚獣での戦いに興味をもっていたので、明久が手伝いをしているときに一緒に召喚したりしていたので、扱いには慣れていきます。

なので、操作技術は明久に引けをとりません。

気が向いたらその内主人公紹介に更新しておきます。（すぐやれよ）

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。（前書き）

今回は第8話のときの策の説明をしようと思ったんですが、一応戦後対談を形だけでも終わらせようと思ったのでこっちを先にしました。

では、どうぞ。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。

「あ、おかえり!」

Cクラスから帰ってきた魁人に愛子は声をかける。

「ただいま。こっちはどうだった?」

「策が出来すぎなくらい上手くいったね。こっちの戦死者は0だった。」

今度は久保が返す。

「あっちも5人しかいなかったからな。良い練習になったかな?」

「まあまあだね。ちょっとはなったかな。」

愛子も久保もそれなりにはできたらしい。

「そろそろ戦後対談を始めてください。」

担任の高橋先生が声をかける。

「霧島さん、呼んでるぜ。」

「……緑野、行つて来て。」

「はあ?」

「そうだね、今回の試召戦争でのトップはある意味緑野くんがそれが筋だろう。」

「…マジかよ…。面倒くせえ…。」

魁人が行く流れになってしまい、魁人は渋々行くことになった。

「悪いが、木下さんついてきてくれるか？」

「別にいいけど…。何で？」

「代表が行かないなら、女子の代表は木下さんだろ。」

「そういうことね…。まあ、いいわよ。」

魁人は男女からそれぞれ1人ずつ代表を出して行く気らしく、翔子を除いた女子でリーダーシップをとれる優子を連れていくことにする。

「じゃあ、行ってくる。まあ、設備を落としてもらっただけだな。」

「うん、行ってらっしゃい。」

魁人と優子は再びクラスに向かう。

「……。」

「…佐藤さん？どうかしたのかい？」

久保は美穂の様子がおかしいのに気づき、声をかける。

「うーん…。この問題はボク達でどうにかできる問題じゃないと思うんだよね…。」

愛子は理由に心当たりがあるらしく、少し考える。

「とりあえず、悪いんだけど久保くんは別のところ行ってもらえ
る？男子に聞かれるのもちよっと嫌な話になるかもしれないし…。」

「分かった。じゃ、また後で。」

久保は自分の席に戻っていった。

「さて…。美穂ちゃん。多分、緑野くんのことでしょ？」

「…はい…。」

「話してごらん？ボクで力になれば、手助けするよ。」

「ありがとうございます…。」

美穂は愛子に向き直ると話し始める。

「…この頃、魁人くんが急に木下さんと仲良くなっちゃって…。
怖いんです。いつか私の近くからいなくなってしまうんじゃないか
って…。もちろん、私と魁人くんが付き合っているわけじゃないの
で、そんなわがママを言うことは許されないのかもしれませんが…。
それでも、私は魁人くんと、出来るだけ、長く一緒にいたいんです
…。」

美穂は途中から涙を浮かべながら話す。

「そっか…。きっと、寂しいんだね…。」

「寂しい…。そうなのかもしれません…。私は、魁人くんがどんどん遠くへ行っちゃうのが、寂しいのかもしれない…。」

美穂は本当に悲しそうな顔で話している。

「…でも、ボクはこのままじゃ、絶対ダメだと思うな。」

「…どういうことですか？」

「ずっと一緒にいたいっていうけど、優子がいるから潔く身を引く？それじゃ、ダメだよ。優子には絶対渡さない、自分のものにしてみせる！って気持ちでいなきゃ。もっと、積極的にならないと。」

愛子は自分の考えを美穂にぶつける。

「ボクが言えることはこれぐらいかな…。後は、美穂ちゃんが自分で考えることだよ。」

「はい…。ありがとうございます、工藤さん…。」

「愛子でいいよ。」

「…愛子さん、ありがとうございます…。私、頑張りますね…。」

美穂は、笑ってそういう。

「その意気だよ！応援してるから！頑張ってね〜！」

愛子はそういつて席へ戻っていく。

「…そうですね…。もっと、積極的に…、ならないと…。木下さんには、絶対、負けません…！」

静かに決意を固めた美穂だった。

「戻ってきたぞ〜。」

それから少しして、魁人が戻ってきた。

「あ、魁人くん、おかえりなさい！」

美穂は魁人を見つけると、その声をかけてくる。

「まったく、ダメじゃない緑野くん。こんなかわいい娘を泣かせちゃあ。」

愛子が茶化すように言う。

「はあ？どういうことだ？」

「ちよつと、愛子さん？！／＼／」

魁人は意味が分からない、というように首をかしげ、美穂は顔を赤くする。

「あはは、冗談だって。じゃあ、また明日ね。」

もう下校の時間らしく、愛子は帰っていく。

「魁人くん、今日も一緒に帰りましょう！」

「ん？別にいいが…、何をそんなに焦ってるんだ？」

「いいですから！早くいきましよう！」

「おい、ちよつと待てつて…。じゃあな、木下さん。」

「え、ええ…。」

美穂は魁人を引っ張って教室から出て行く。

「…やれやれ、これから大変になりそうだね…。」

その様子を久保は遠くの席から見ていた…。

第10話 戦後対談。そして美穂の悩み。（後書き）

…なんかおかしいよおお？！

はあ、この頃上手く話が書けないなあ…。

だれか、アドバイスを恵んで下さい…（泣

そして愛子の美穂に対する呼び方が分からない！

なんかどんどんおかしくなってる気がする。

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第10'5話 策って結局何だったの？（前書き）

今回は第8話の策の説明のところの話です。

ただの振り返り的な感じですからませる予定なので、流しても大丈夫だ
と思います。

では、どうぞ！

第10 / 5話 策って結局何だったの？

「さあ、策の説明を始めるぞ。」

Aクラスの全員が魁人のいうことに耳をかたむける。

「まず、向こうの動きだ。おそらくあの様子だと、何も考えず全員で突っ込んでくるだけだ。何も怖くない。」

「確かに、すごい怒りようだったわね…。」

「優子からしたらとんだとばっちりだったよね。」

優子は少し引き気味に話し、愛子は苦笑いする。

「戦う場所だが、この広い教室を利用しようと思う。」

「この教室を、かい？」

ここで戦う、という魁人の言葉に、久保は聞き返す。

「そうだ。俺の策も、その方がやりやすいしな。」

魁人はその方が都合がいいと言う。

「まず、俺達は部隊を3つに分けることにする。まず1つ目はその相手の突撃を抑える部隊。これは女子全員に任せる。このクラスは女子の方が多いからな。」

「わかったわ。」

女子から代表して優子が返事をする。

代表はそんなに戦うわけにはいけないのでこの部隊に入らないことをわかっているからだ。

「次に2つ目の部隊。抑えた相手を後ろから攻め立てる部隊。これは男子に任せる。」

「なるほど。だが、後ろをとるのは難しくないかい？この教室で戦うんだろ？」

久保は魁人の策に疑問をもち、質問する。

「いや、そこまで難しくはない。さっきも言ったが、相手はただ突っ込んでくるだけだ。相手が突っ込んできたところを左右二手に分かれて通してやれば、簡単に後ろをとれる。信じられないかもしれないが、本番になったら分かるさ。」

「わかった。」

男子からはさっきまでと同じ久保が返事をする。

「そして最後の部隊。男子と女子がCクラスを抑えている間に、Cクラス本陣へ奇襲をかける部隊だ。これには俺が参加する。」

「1人で奇襲をかけるんですか？危険だと思いますが…。」

今度は美穂が質問を投げかける。

「もちろん、そんな無謀な真似はしない。この部隊には霧島さんを除いたメンバーでの数学トップ3が入る。高橋先生、誰か調べてくれますか？」

「分かりました。少し待って下さい。」

魁人が奇襲をかけるのは3人だと言い、高橋先生にその選抜に選ばれる人を調べてくれ、と言う。

「…出ました。緑野くん、木下さん、佐藤さんですね。」

「ありがとうございます。さっきの3人…俺、木下さん、美穂の3人で奇襲をかける。そのために、男子は絶対に後ろにCクラスをやつを通さないでほしい。」

「分かった。任せてくれ。」

また久保が返事をする。

「今回の戦いは召喚獣の操作に慣れるため、つまり操作の練習だと思ってくれ！無理に相手を撃破する必要はない。1対1なら負けることはないから、必ず1対1に持ち込んでくれ！」

『了解！』

「男子の指揮は久保くん、女子の指揮は工藤さんに任せる。2人はその場その場に応じて、指示を出してくれ。」

「「わかった（よ）。」「」

「おそらく、開戦は昼過ぎになると思う。それまでに自分がやるべきことをしっかり理解してくれ。以上だ。」

そう言つて魁人は席に戻つた。

ほとんど何も話さなかつた翔子も、魁人の話が終わると席に戻つていった…。

第10.5話 策って結局何だったの？（後書き）

こんな感じで説明していました。

特に説明する必要もないかな？と思ったので、こういう番外編みたいな感じで説明しました。

次回からは遂にA対Fの話に入っていく…はず。

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第11話 優子の心配事、実現間近？

「あ、魁人くん！」

たぐだぐいぐまぐ登校中ぐ。

「ん？美穂か。」

「おはようございます。」

「ん、おはよう。なんか、今日は機嫌がいいな？」

「はい、今日は朝から魁人くんに会えましたから。」

「ん？どういうことだ？」

「な、なんでもないです！」

美穂は言って恥ずかしくなったのかごまかした。

「おはよう。」

「おはようございます。」

魁人と美穂は2人で教室に入る。

「お、朝から2人で登校？熱いねえw」

愛子がいきなり茶化す。

「そ、そんなんじゃないですよ／＼」

「…あいさつも返さずいきなり茶化されるとはな…。」

美穂は顔を赤くし、魁人はため息をつく。

「あ、緑野くん、おはよう！」

「ん、木下さんか。おはよう。」

優子はきちんとあいさつをする。

「ん、久保くんはどうした？」

「さっきまでいたけどね。トイレじゃない？」

久保がいないことに気づき、魁人は問う。

「皆、Aクラスにお客さんだよ。」

するとその久保が戻ってきた。

…Fクラスをつれて。

「やっぱり来たか、雄二。」

「ああ、やっとここまで来たぜ。」

「待ちくたびれたぜ…。歓迎するよ。」

魁人はFクラスとの勝負を楽しみにしていたらしく、笑っている。

「さて、今日は宣戦布告しに来たわけだが…。ちょっと交渉をしたい。」

「まあ、立ち話もなんだから、こっち座れよ。」

「ん、すまないな。」

魁人は雄二達Fクラスを席に案内する。

ちなみにFクラスから来たのは雄二、明久、康太、姫路の4人である。

「で、交渉つてのは何だ？」

今回、交渉のテーブルについているのは魁人、補佐として近くに優子がいる。

「ああ。勝負を一騎打ちにしたい。」

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

雄二は基本のクラス同士の対決ではなく、代表同士の一騎打ちで勝敗をつけたい、という。

「却下だな。俺達にはわざわざリスクを犯す必要がない。」

「賢明だな。」

魁人はすぐに却下し、雄二は予想していたのか構わず続ける。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「ああ、お前らのせいで起きたやつのことか？」

「ちょっと、それどういうこと?」

雄二はCクラスとの試召戦争について聞くと、魁人はその元凶である雄二を睨み言うが、優子は話についていけないようで、魁人に聞く。

「簡単なことだ。あのCクラスとの戦いは雄二に仕組まれたことだっただけのことだ。」

「やっぱり気づいてたか…。」

「当たり前だ。」

「…そういうことね…。」

魁人はあの戦いは雄二が仕組んだこと、と言うと優子は納得してうなずく。

「さて、ここで1つ雄二にしてもらわなければならないことがある。」

「なんだ?」

魁人は雄二がすべきことがある、と言う。

「決まってるだろ?…木下さんに謝れ。」

「は?」

「は？、じゃねえだろ。木下さんはそのせいでとんだ濡れ衣をかけられたんだ。そのぐらいして、当然だろ？」

魁人は優子に謝れ、といつもとは違うとても真剣な眼差しで雄二に言う。

「…そうだな。すまなかったな、木下姉。変な濡れ衣をきせて…。」

雄二は、魁人がこの眼をしたときは決して意見を覆さないことを知っているので、真面目に優子に謝る。

「ま、本人は肅清したし…。別にいいわよ。」

「…朝あいつがボロボロだったのは、そういうわけか…。」

優子はそうなった原因を肅清した、というと、雄二は少し顔を青ざめさせる。

「さて、本題に戻るぞ。簡潔に言うと、Cクラスはまるで相手にならなかった。お前も知っているんだろ？」

「ああ…。まさか、30分で終わらせるとは思わなかった。」

魁人はCクラスなんて相手にならなかった、ということそのことを雄二も知っていたようで苦笑いを浮かべる。

「Bクラスを使って脅すつもりかもしれないが…。俺にはその手は通用しない。Cと同じように、瞬殺してやるさ。」

魁人は雄二の考えを読んでいるようで、それは通用しない、という。

「そもそも、こんな策が俺に通用すると思ったのか？」

「いや、交渉相手は木下姉だと思っていた…。お前は面倒くさがって出ないだろうと思ってな。」

雄二は魁人に通用する策だとは思っていなかったようで、魁人以外に使うつもりだったと言う。

「あてが外れたな。だが、条件次第では飲んでやってもいいんだぞ？」

そこに魁人は少し助け舟を出す。

Fクラスとの勝負をそんな簡単につけたくないからだ。

「そうだな…。なら、5対5の代表戦ならどうだ？」

「そうだな…。別にかまわない。教科選択権は俺らが2、お前らが3つてとこか？」

「ま、妥当なとこだろ。交渉成り…」

「……ちょっと待って。」

「うわっ！」

話し合いを終わりにしようと思ったら、翔子が話に入ってきた。

「なんで、そんなに驚いてるんだ？明久。」

「だって、急に…。」

明久は急に出てきた翔子に驚いたようだ。

「……1つ、条件をつける…。」

「ん、何だ？」

ここで翔子は1度姫路のほうを見る。

「……負けたほうは、なんでも1つ言うことを聞く。」

「…なぜお前らはそんなに挙動不審になる？」

康太はカメラの手入れを始め、明久はなぜかオドオドしている。

「だ、だって、もし負けたら姫路さんが…」

「交渉成立だな。」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

明久はさっきの翔子の行動から何か考えたらしく、姫路の了承がない、と言う。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

雄二は勝つ自信があるらしく、自信たっぷりにつ。

「時間はどうする？」

「そうだな。10時からでもいいか？」

「わかった。じゃ、また後でな。」

「ああ。」

魁人と雄二で時間を決めると、Fクラスは戻っていった。

「さて、交渉も終わりだ。席に戻るぞ…。って、木下さん？どうした？」

後半ほとんど話に入ってこなかった優子は何か考えていたらしく、魁人が声をかけても返事をしない。

「どうした木下さん？体調でも悪いのか？」

そう言って魁人は優子に顔を近づける。

「はっ？！な、何でもないわよ？！／／／」

優子は気がつく、魁人の顔が近くにあったため、顔を赤くする。

「そうか。じゃあ、俺は席に戻るな。」

そう言っつて魁人は席に戻っていった。

（Fクラスと、ってことはもちろん秀吉も来る…。緑野くんは…
緑野くんなら、絶対に大丈夫…！でも、もし…。）

優子はまだあの事が不安らしく、浮かない顔をしていた…。

第11話 優子の心配事、実現間近？（後書き）

うーん、美穂と優子の魁人との絡みに差がありすぎるかな？

なんか優子との話ばかり書いてる気がする…。

次はやっとA対Fです。一体どうなるか、魁人は優子の不安を晴らせるのか、

お楽しみに！

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第12話 A対F!最下層からの挑戦!〜前半〜(前書き)

やっとAクラス対Fクラスに入れました…。

では、どうぞ。

第12話 A対F!最下層からの挑戦!〜前半〜

「では、両名共準備は良いですか?」

今回は一騎打ちの形で行うため、立会いは全教科のフィールドを展開できるAクラスの担任、高橋先生だ。

「ああ。」

「……問題ない。」

もちろん今回の会場はAクラス。

両代表が、準備完了を伝える。

「それでは、1人目の方、どうぞ。」

「……（スック）」

Fクラスでは康太が立ち上がる。

「初めから康太か……。」

魁人は康太の成績を知っているため、少し顔を歪める。

「じゃ、ボクが行こうかな。」

Aクラスからは、愛子が立ち上がる。

「1年の終わりの転入してきた、工藤 愛子です。よろしくね。」

愛子はFクラスに自己紹介する。

「教科は何にしますか？」

「……保健体育。」

康太は自己の唯一にして最強の剣、「保健体育」を選択する。

「土屋くんだけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子も絶対的な自信をもっているらしく、臆せず言う。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…キミと違って、「実技」で、ね。」

問題発言。

「…工藤さん。女子がそういうことを言うのはあまり…」

魁人は苦笑いする。

「そっちのキミ、吉井くんだけ？勉強苦手らしいし、保健体育でよければボクが教えてあげようか？もちろん、「実技」で。」

愛子は明久を指名して、挑発(?)する。

「フッ。望むところ…」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが。」

「…明久。生きてれば、その内良いこと、あるって…。」

明久は今にも死にそうなくらい、悲しい顔をしていた。

「そろそろ召喚を開始して下さい。」

「…工藤さん。油断するなよ。」

「大丈夫だって。試獣召喚サモンつと。」

「…………試獣召喚。」

魁人は愛子に警告するが、愛子はそのまま召喚する。

「なんだ、あの巨大な斧は？！」

愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧というミスマッチな召喚獣を召喚していた。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

そう言つと、愛子は（おそらく）腕輪の力で斧に雷光を纏わせ、異常な速さで康太の召喚獣に接近する。

「これならいけるな。」

「ああ、まずは1勝だ。」

その様子を見て、Aクラスの面々は勝利を確信する。

ちなみに点数はシステムの不調か、まだ出ていなかった。

その中で魁人は、

「…負けたな。」

と、1人呟いていた。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん。」

そう言つと、愛子は康太を一刀両断にしようと、斧を振り下ろす。

「ムッツリーニッ！」

明久もその様子に不安を覚えたか、声をあげる。

だが、次の瞬間、

「……加速。」

康太がそう呟くと、康太の召喚獣は姿を消し、

「え？」

「……加速、終了。」

もう一度康太が呟くと、愛子の召喚獣は血を噴出し、消滅した。

そして、遅れて点数が表示される。

保健体育

Aクラス Fクラス

工藤愛子VS土屋康太

446点 572点

康太の勝利が確定する。

向こうの明久も驚いているようで、雄二が明久に何か言っている。

「そ、そんな…！この、ボクが…！」

愛子はかなり悔しがり、床に膝をつく。

「…だから言っただろ。油断すんなって。ま、ある意味自業自得だよな。」

「ちょ、ちょっと?!それは言いすぎじゃない?!」

そんな愛子に、魁人は厳しい言葉をかけ、優子はそれを咎める。

「…いや、悪いのは、ボクだから…。仕方ないよ…。」

愛子はショックを引きずり、クラスメートの中へ消えていった。

「…いくらなんでも、言い過ぎよ。」

「いや、あれくらいでちょうど良い…。愛子はAクラスの大事な戦力なんだ。いざつて時、油断と自信の違いも分からないようじゃ困るからな。それに…。」

魁人は1度言葉を切る。

「…工藤さんはあれくらいじゃへこたれない。今までの付き合いで、そのぐらいのことは分かるさ。」

魁人もちゃんと愛子のことと考えているようで、厳しい言葉をかけた理由を微笑みながら話す。

「…でも、流石に厳しいんじゃない？一応、謝っておきなさいよ？」

「…俺から言う気はない。意味が無くなるからな。」

優子は一応謝れと言うが、魁人はそれでは意味が無い、と言う。

「では、次の方、どうぞ。」

2回戦が始まる。

「さて、俺が行くか。」

Aクラスからは魁人が出るようだ。

「よし、頼んだぞ、明久。」

「え、僕?!」

Fクラスからは明久が出るようだ。

「へえ、明久とか…。おもしろいな。」

「言って来い、明久。俺は信じてる。」

魁人は笑うと、雄二は自信たっぷりと言う。

「へえ…。僕に本気を出さ「御託はいい。とっととやろっぜ。」
まだ言い終わってないのに?!」

魁人は明久の言葉を遮り、始めようと言う。

「教科選択権は貰うぜ。先生、俺とこいつで別の教科で対戦って
出来ますか?」

「設定を変える必要があるので時間はかかりますが…。出来ない
ことは無いですね。」

「分かりました。では……。」

魁人は自分と明久で別々の教科を使いたらしく、先生に聞き、どっちが何の教科を使うか言う。

「……俺が数学、明久が総合科目でお願いします。」

「……分かりました。では、少し待って下さい。」

先生にそう言うと、高橋先生は作業を始める。

「ちょ、ちょっと、大丈夫なの?!」

「ああ、俺は工藤さんと違って油断なんてしていない。ちゃんと考えてこうしてるんだ。心配するな。」

優子は心配そうに聞くが、魁人は心配はいらない、と返す。

「いいの? 魁人くん。」

「ああ、お前じゃ総合科目でもたかが知れてるしな。こうでもないつつまらない。それと、俺はお前を呼び捨てで呼んでるんだ。お前も「くん」なんかつけるな。……気持ち悪い。」

「今、僕を馬鹿にした上、罵倒しなかった?!」

「お、分かったか。進歩したな。」

「僕だってそれぐらいストレートに言われれば分かるよ?!」

魁人は明久を馬鹿にし、明久はそこまで馬鹿じゃないと言う。

「ま、でも、後悔しないでね？魁人。」

「後悔なんてするはずないだろ？勝つのは俺なんだからな。」

魁人は絶対的な「自信」を持っているようで、明久にそう言う。

「用意が出来ました。では、始めてください。」

「「^{サモン}試獣召喚！」」

2人同時に召喚獣を出す。

今回はすぐに点数が出る。

数学&総合教科

Aクラス Fクラス

緑野魁人VS吉井明久

847点 594点

「…ここまで差があるとはな。」

「僕をそんな蔑む目で見るのはやめて?!」

点数を見ると、A、Fクラス共に明久に蔑みの眼差しを向ける。

「さあ、行くぞ！」

まずは魁人が明久（ここからは「召喚獣」という表記はとばします）に向けて超スピードで接近する。

「そらっ！」

そして、明久の喉に鋭い突きを打つ。

「甘いよ！」

明久はそれを器用に流し、頭を殴ろうとする。

「…かかったな。」

「えっ?!」

その瞬間、流したはずの魁人の竹刀が明久の頭上に降ってくる。

「くっ?!…あれ？」

咄嗟に明久は木刀で防ごうとするが、竹刀はすり抜け、明久にも当たらず、そのまま消えた。

「そこだ！」

「しまった?!…ぐあっ！」

その隙に魁人は明久の頭に面を打ちそのまま下がっていった。

「…武器の幻影を創り出す能力か？」

雄二が自分の予想で腕輪の能力を話す。

すると、

『完璧に面ありだ…。綺麗に引き面が入ったな。』

Fクラスの方からこんな声がする。

「…？ お、お前は須川？！ この学園だったのか？！」

「久しぶりだな、緑野。」

声の主、「須川 亮」は前に出てきて、魁人に言う。

「召喚獣でも剣道の動きを活用できるとはな。しかも、突きは高校からだつてのに。」

「お前でも出来るだろ。お前の方が現役時代は強かったんだからな。」

「えーつと、僕は無視？」

2人で話していると、フィードバックから復活した明久が声をかける。

「おっと。悪いな。じゃ、須川、後でな。」

「ああ。」

そう言つと須川はFクラスの中に消えていった。

「しかし、お前も馬鹿だな。さっき攻撃しちまえば良かったものを。」

「……。ぼ、僕はそんな卑怯な真似h「言い訳するな。」……。」

明久はまた言葉を遮られ、いじける。

「そんなことしてる暇あるのか？行くぞ！」

魁人はそう言つて明久にまた近付いていく。

「くっ！」

明久は迎え撃つ姿勢をとる。

「……終わりだ。」

「え？……いったあ？！」

数学&総合教科

Aクラス

Fクラス

緑野魁人

VS

吉井明久

807点

0点

「勝者、Aクラス。」

高橋先生の声が響く。

フィールドには、さっきまで前から明久に迫っていた魁人が明久の裏にいた。

「え？え？　どうということ？」

「誰が幻影を創れるのは武器だけと言った？」

「…そういうことか。」

明久はまだ何があったか理解していないようで、魁人が幻影を創れるのは武器だけじゃない、と言う。

「つまり、お前は自分の幻影を明久に突っ込ませ、その隙に後ろから攻撃したってことか。」

「ああ。俺の『幻影』^{ミラージュ}は俺、もしくは俺が触れているものの幻影を創りだせる。」

雄二は魁人がやったことを理解し、魁人は自分の腕輪の能力を説明する。

「…終わってみれば、やっぱり緑野くんの圧勝だったわね…。」

「相手がFクラスとはいえ、単教科で総合教科に挑んで圧勝って凄いですね…。」

Aクラスでは、魁人の余裕の圧勝に、優子と美穂が苦笑いしている。

第12話 A対F!最下層からの挑戦!〜前半〜(後書き)

流石に一気に全部は無理なので、前後半に分けました。

魁人の腕輪の能力は『幻影^{ミラージュ}』でした。

1巻の内容は多分、あと多くて3話ぐらいで終わると思います。

次回は、A対F後半です！

次回も読んで下さると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

第13話 A対F!最下層からの挑戦!〜後編〜(前書き)

一回消えて、やる気無くしました…。

この頃、1日1話更新の辛さを身にしみて実感しています。

ちゃんと継続できている人の偉大さを改めて実感しました。

第13話 A対F!最下層からの挑戦!〜後編〜

「では、3人目の方、どうぞ。」

「アタシが行くわ。」

Aクラスからは優子が名乗り出る。

「ワシがいこう。」

Fクラスからは、優子の弟「木下 秀吉」が名乗りを上げる。

「…秀吉か。」

「?!」

魁人は秀吉の存在を知っていたらしく、優子はそのことに驚く。

（緑野くんは秀吉のことを知っていたの?…じゃあ、なんでアタシに優しく…。…もしかして、アタシが秀吉に似ているから?）

「木下さん…。木下さん?」

優子は困惑しているらしく、魁人の呼びかけにも気づかない。

「木下さん?大丈夫?」

「え?! だ、大丈夫よ?!」

「…木下さん、この頃何かおかしいぞ？熱でもあるのか？」

そう言うと、魁人は自分の額を優子の額に当てる。

「…熱は無いか。」

優子はやっと何があつたか理解し、顔を真っ赤にする。

「ちょ、ちよつと何してんのよ?!」

「ん、熱があるのかと思ってな。ちよつと確かめただけだ。ま、
そんだけ元気なら大丈夫だろ。」

魁人は特に異常は無いと判断し、今回の策についての頼みごとを
しようとする。

「今回は、ちよつと無茶なことなんだが…。」

「何？」

「…秀吉に教科の選択をさせ、教科の宣言をさせた上で、戦わず
勝ってきてくれ。」

文字通り無茶な頼みだ。

「…本当に無茶な頼みね…。」

「それは分かってる。だが…、頼む。手段は問わない。」

「…分かったわ。何とかしてみる。」

「…ありがとう。頼んだ。」

魁人も無茶なのはわかっているらしく、頭を下げると、優子は何とかしてみる、と言う。

（緑野くんは、やっぱり秀吉に似ているからアタシのことを心配したり、優しくしてくれたり、するのかな…。）

優子は秀吉のなんらかの劣等感をもっているらしく、そう考えていた。

「さて、教科選択権は秀吉にあげるわ。」

「ありがたい。では古典で頼むのじゃ。」

優子は、まず魁人の指示通り教科を選択させる。

「わかりました。」

すると、古典のフィールドが展開される。

「…ところで秀吉。」

「うむ?。」

「…ちよつと話があるんだけど。こっち、来てくれない？」

満面の笑みで優子は言う。

「し、Ｃクラスの件は昨日でいいから、来て？」…分かったのじゃ。」

秀吉は震えながら、優子について行き、廊下に出る。

「何をする気かは分かんが…。あそこまで怖がってたんだ。何かあんだろ…。」

その時点で、魁人は策の成功を確信し、廊下での話など聞いていなかった。

ガラガラガラ

「秀吉は急に具合が悪くなったから、保健室に行ってくて。他の人を出してくれる？」

満面の笑み。

「い、いや…。ウチの不戦敗でいい…。」

雄二は優子の笑顔に圧され、不戦敗を認める。

「…フツ…。」

魁人は、誰も気づかないぐらいに笑みを浮かべた。

「あれでよかったの？」

「ああ、上出来だ。助かった、ありがとう。」

魁人は想像以上の出来に、今度は普通に笑みを浮かべる。

「無茶な頼みだったからな。今度、何か奢ってやるよ。」

「え、本当？」

魁人は無茶を聞いてもらったため、礼がしたい、と言う。

「ま、それについては後だ。これが終わってからな。」

「そ、そうね…。」

（もしかして、これってデートのチャンス?!）

優子は浮かれ、先程まで頭を回っていた不安も、少しの間どこかへいった。

「これで2対1です。では、次の方。」

「あ、は、はい。私です。」

「それなら僕が相手をしよう。」

Fから姫路、Aから久保が名乗りをあげた。

「久保くん、1つ頼みがある。」

「なんだい？」

「あつちに教科選択権を使わせてくれ。負けても構わない。」

「分かった。」

久保は指示を預かり、対戦の場へと向かった。

「教科選択権はそっちが使っていいよ、姫路さん。」

「…分かりました。では、総合教科をお願いします。」

「分かりました。では、始めて下さい。」

（…よし、勝った。）

久保が指示を守ったため、Aクラスの勝利を確信し、勝負には興味を示さなかった。

「…すまない。負けてしまったよ。」

「いや、いい。さっきも言ったが、選択権を向こうに使わせただけでいいんだ。」

久保は負けたらしく、魁人は指示を守ったからいいと言う。

「最後の勝負です。代表の方、どうぞ。」

「……はい。」

「俺の出番だな。」

もちろん、両クラスの代表が出る。

「教科はどうしますか？」

「どうする？霧島さん。」

魁人は当然のように翔子に聞く。

「俺達が教科を決める。」

「何言ってるんだ、雄二。お前らはもう…」

「3回の教科決定権を使い果たしているんだよ。」

「…何？」

「よく考える。まず、始めと4番目で康太、それと姫路さんが使った。」

「ああ。それだけだ。2回だけだろ？」

「…甘いな。秀吉も使ってるんだよ。」

「はあ？秀吉は不戦敗だろ？」

「いや…。嘘だと思うなら、記録を見る。高橋先生、3回戦の結果をお願いします。」

「分かりました。…出ました。」

古典

Aクラス	Fクラス
木下優子	V S 木下秀吉
343点	UNKNOWN

「な？教科が古典になっている。なぜなら、秀吉が古典を選び、フィールドを展開した後に棄権したからな。」

「…くっ！」

「まんまと引かなかったな、雄二。お前じゃ頭で俺には勝てねえよ。」

「クソッ！」

魁人はFクラスは既に3回教科を選択している、としてAクラスの教科選択権を行使した。

「では、気を取り直して…。教科は何にしますか？」

「……総合教科。」

雄二がまともな勝負で翔子に勝てるはずも無く、Aクラスの勝利が確定した。

第13話 A対F!最下層からの挑戦!〜後編〜(後書き)

策で上がってきたFクラスを策で落とす。

ちよつと鬼畜です。

次は試召戦争後の出来事です。

今回は1回本文消えるしPC1回壊れるし、大変だった…。

紫苑さん、誤字報告、ありがとうございました!

次回も読んで頂けると嬉しいです!

お読み頂き、ありがとうございました!

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。(前書き)

明日実力テストなのに何やってんでしょうかw

では、どうぞ。

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。

「3対2でAクラスの勝利です。」

高橋先生が結果を宣言する。

「……雄二、私の勝ち。」

「クソッ……！」

雄二は策を使うことすら出来なかったことが悔しいのか、唇をかんでいる。

「しょうがないよ。魁人の方が一枚上手だったんだから。」

「ほう。明久でも上手って言葉を知っていたのか？」

「だからそこまで馬鹿じゃないって?!」

明久が雄二を慰めると、魁人はそれを茶化する。

「……ところで、約束。」

「……（カチャカチャカチャ!）」

康太は凄まじい勢いでカメラのセッティングをしている。

「康太、何してんだ?そんなに人の告白シーンを撮りたいのか?」

「は？」

魁人は翔子が何を言おうとしているのか分かるらしく、明久は意味が分からないように首をかしげている。

「わかっている。何でも言え。」

「……それじゃ……」

「……雄二、私と付き合って。」

予想しなかった出来事に、皆固まっている。

動けるのは3人。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

予想できていた相手。

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

告白した本人。

「やっぱりか。なんとなく分かってたけどな。」

そして、それに気づいていた傍観者の3人である。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない。」

「良かったな、雄二。こんなに愛してくれる人、他にはいないぞ？」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあ！放せ！やっぱこの話はなかったことに……いいから行つて来い。」ぐふっ？！」

抵抗する雄二に魁人はボディブローを食らわせ、黙らせる。

「じゃ、霧島さんいつてらっしゃい。楽しんでいい。」

「……ありがとう。緑野はいい人。」

そう言って、翔子は雄二を連れ（ひきずり）、教室を出て行った。

「さて、あとはお願いします、西村先生。いますよね？」

「…なんで分かるんだ？」

魁人は廊下に西村先生がいることが分かっていたようで、呼びかける。

「話はあなたのFクラスでして下さい…。ここだと邪魔なんで。」

「そのことまで分かっているとは…。まあ、いい。さてお前ら、我がAクラスについて話がある。教室は行くぞ。」

「は？我が？」

「いいから行って来い。話があるようだからな。」

明久はまた首をかしげているが、魁人が無理矢理送り出す。

「さて、皆ご苦労だった。今日はもう終わりだ。帰っていいぞ。」

Aクラスの皆が再起した頃に、魁人は言う。

「あの、緑野くん…?」

「ん?木下さんか。どうした?」

「ちよつといい?」

「まあ、いいが…。」

優子は魁人を教室の隅へ連れて行く。

Aクラスは広いため、端にいと、あまり目立たない。

「で、どうした?」

「…緑野くんは、秀吉のこと、知ってたの?」

優子は自分の不安について魁人に聞きたいことがあるらしい。

「ああ、知ってた。明久とよく一緒にいたからな。そのとき話したりした。」

やはり魁人は秀吉を知っていたようで、理由を話す。

「じゃあ、…じゃあ何でアタシにあそこまで優しくしてくれるの?」

「ん?どういうことだ?」

「何で秀吉がいるのに、アタシにあそこまで構ってくれるのよっ

「！」

優子は涙を流し、つかみかかりそんな勢いで魁人に聞く。

「はあ？何言ってるんだ？」

「だって、そうじゃない！皆、皆秀吉のことを知るとアタシから離れていった！アタシより秀吉の方がかわいいってね！」

「木下さん、少し落ち着け……。」

「何で、何でよ?! 緑野くんだって、そう思ってるんじゃないの?! アタシに構ってくれるのだって、アタシが秀吉に似てるからでしょ?! それだったら、アタシは……。」

「一回、落ち着けて……。」

「……?!」

魁人はなだめるように優子を優しく抱きしめる。

「今までのやつがどうだったかは知らないけどな、少なくとも俺はそんなにつまらないことで木下さんから離れたりはしない。そもそもアイツは男だしな。何があったとしても、木下さんは木下さんだ。秀吉の代わりなんかじゃない。もっと自分に自信を持ったらどうだ？」

魁人は優子に優しくそう言う。

「緑野くん……。うわあああん……!」

優子は今まで溜まっていた不安を全部流すように、泣き続けた。

「…ごめんね？取り乱して…。」

「いや、構わないさ。木下さんの役に立てたなら、別にな。」

魁人は笑顔でそう言う。

「…やっぱり、アタを好きになってよかった…。」

「ん？何か言ったか？」

優子は小さい声で呟くと、少し笑みを浮かべる。

「いや、何でもないわ。」

「そうか？」

魁人には聞こえなかったようですね。

「そういえば、奢りの話…。」

「ああ、そうだったな。何をすればいいんだ？」

優子は思い出したように言う。

「そうね…。今度の土曜日、ちょっと付き合ってくれる？」

「ん、別にいいが…。それだけでいいのか？」

「ええ。…詳しいことは後でメールするわ。じゃあ、今日はありがとう。じゃあね。」

「ああ、じゃあな。」

そう言って、優子は帰っていった。

「魁人くんっ！」

「ん、今度は美穂か。どうかしたか？」

美穂は今のことを遠くから見ていたようで、駆け寄って来る。

「今度の日曜日、空いてますか？」

「ん、まあ、空いてるが…。どうした？」

「ちょっと、1日付き合ってください！」

美穂は聞いていたらしく、自分も誘おうと思ったらしい。

「別に構わない。それだけか？」

「はい。じゃあ、帰りましょう。」

美穂も約束を取り付けると、用は済んだようで、2人は帰っていた。

この日をもって、Fクラス中心の試召戦争騒ぎは終焉を迎えた。

第14話 試召戦争騒ぎ、終焉。（後書き）

はい、やっと1巻の内容終わりました。

次は…2人とのデート編をやるか、そのまま2巻に入るか、迷ってます。

誰か、意見を下さる人がいればいいんですが…。

そんな親切な人、いるかなあw

とりあえず、意見募集します。

この頃思った。

美穂のキャラ、壊しすぎか？w

次回も読んで頂けると嬉しいです！

お読み頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

バカと居眠りとAクラス

2011年12月1日18時52分発行